

発信型英語授業における英会話文作成課題と 機械翻訳利用

下山 幸成

要旨

本稿では、英語に苦手意識を持っている学生が英語に興味を持ち、楽しく学ぶことができるように意図した、英会話文作成課題を中心とした発信型英語授業を紹介する。それに加えて機械翻訳利用の実態を報告し、その利用が学習意欲を促進させるのかどうかを検証した結果を報告する。本授業は「学習してから発信する」ではなく「発信しながら学習する」というサイクルで授業前の課題、授業中の活動、授業後の課題を組み合わせて行ったものである。今までアウトプット経験が少なかった学習者がアウトプットできる楽しさや喜びを味わい、さらに学びたいという意欲をもって授業を受け終わったことを最終授業時に行ったアンケート結果をもとに示し、本授業をこれからの授業の一形態として提案する。

I はじめに

大学では、授業時間前の学習、授業時間内の学習、授業時間後の学習をシラバスに明記することが求められている。また、文部科学省（2017a, 2017b, 2018）は小学校・中学校・高等学校のいずれの新学習指導要領においても、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めることを示し、留意点の1つとして以下の内容を記載している。

1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。

このような流れの中で、授業前・授業中・授業後がつながり、授業と授業がつながる授業設計、人が集まる授業中にこそ学習者同士が協働して学び合う授業設計は極めて大切なことであると考えられる。

また、文部科学省（2017b）では、「授業では依然として、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていな

い」という課題を指摘している。一般的に多いのは、インプットから始まり、練習をしてからアウトプットにつなげるという活動過程だと考えられる。しかし、アウトプットのための機会や時間を十分に確保することができなかつたためにアウトプット体験が少なく、経験不足や成功体験不足のためにアウトプットに自信を持ってないで現在に至る学習者が、実際には多いと推測できる。そこで、本稿で扱う授業では、中学校と高等学校の計 6 年間にある程度の英語のインプットは行われていることを考え、実際に英語を発信する (Do) ことから始め、その結果を評価する (Check) ことで自分に足りない部分に気づき、その不足部分をどうやって改善する (Action) かを計画して (Plan)、次の発信 (Do) へとつなげるという、いわば、DCAP サイクルの実践である。この方法では、自分の欠点を自分で発見し、自分でそれを補おうとする気持ちがわくため、主体的な学習への取り組みに結びつけることができると考えられる。また、英語が特に好きではないが日常的な英会話はできるようにになりたいという漠然とした希望を持っている学生にとって、本稿で扱う英会話文作成課題は、日常生活を英語にする活動であるため、英語への親近感を高めるために役立つと考えられる。

II 授業内容と課題・フィードバック

1. 科目の目的と対象学生

本稿で扱うのは、筆者が 2022 年度に東京都内私立大学で担当した英語必修科目の授業についてである。本科目は、英語の基礎的な、聴く、話す、読む、書く、の 4 技能を総合的にレベルアップさせることを目的とし、特にリスニングとスピーキングに主体を置き、正しい発音・アクセント・イントネーションを聞き分けることができ、自分でも実際にそれを区別して音声化できることを目指したものである。

対象学生は、大学入学直前にクラス分けのために行ったプレイスメントテストの結果によると TOEIC L&R 換算点が 370 点前後であり、受講している英語の必修科目は前期・後期ともに本授業のみである、非英語専攻の 31 名からなる大学 1 年生である。

2. 授業の大きな流れ

かつて一般的に多かった授業の流れは、インプットから始めて、覚えて練習した後にアウトプットにつなげる「学ぶ→覚える→練習する→使う」という順番の活動過程だったと考えられる。しかし、実際にはアウトプットのための機会や時間を十分に確保することができずに「使う」経験が少なく、経験不足や成功体験不足のために「使う」ことに対して自信を持ってなかつたと推測できる。そこで、不完全であれ中高の 6 年間である程度のインプットは行われていることを考え、アウトプットを行いながら自分の英語力を実感して自分に欠けている要素に気づくことから始めることにした。自分の現状を把握してから必要

だと感じた学習要素を意図的にインプットとして学習し、学習したものを次のアウトプットとして使いながら多くの経験と成功体験を増やすことで、少しずつ自信を持っていけるような学習過程を辿れるように配慮した。

3. 機械翻訳利用の狙い

本授業は下山（2019）、下山（2022）で報告している授業と同じように、eラーニングを授業前学習として活用し、そこで学習した内容を使って授業時間内に英語を発信するための練習や活動を行い、授業後に授業時間内に行ったことをふり返る、という流れを踏襲している。本稿は、英語を発信するために新たに機械翻訳（Machine Translation, 以降 MT）の利用を許可したという点が異なる。

MT を利用した英語教育に関して、藏屋（2019）は、英語初級者には MT 利用の前に行う日本語自体を MT 用に編集する作業（前編集）を英語指導者の下で練習することによって、英語のレベルが上がれば出力後の精度を上げるために行う編集（後編集）の練習に焦点を当てることによって、英語ライティングの訓練が効率的に進むと期待できる（p.33）と述べている。また、小田（2019）は、MT 使用を禁ずることはできるが、それだけでは効果が少ない（p.17）ことを指摘し、「学生が自然と機械翻訳の利用を避けるような活動」と「機械翻訳の使用を許可し、その利点を享受しつつ、悪影響をできるだけ避けられるような活動」を紹介している。筆者は、MT 利用の前編集や出力結果を使いながら指導する後編集の過程を学習者と共有することで、英語力を高めるための指導ができると考えている。また、MT を利用しながらでも発信する経験を積むことで、発信することに慣れ、自信を持ち、より発信したいという気持ちになると考えている。そこで、学習者に機械翻訳利用を可として、利用実態を検証することにした。

4. 課題の意図と内容

本授業で平常時に行うのは、大きく分けて 2 つの課題であった。1 つ目は授業前課題としての eラーニングである。ウェブ上の動画学習サイト「EnglishCentral」（<https://ja.englishcentral.com/>）の中で各自が興味のある動画を自由に選んで視聴し、その動画内で扱われている語彙や表現を英語音声とともに学び、使われている台詞の音読練習を行う。各自が興味ある内容を選べるようにしたのは、積極的に取り組んで欲しいという思いがあっただけでなく、ここで視聴した動画の内容を話題にして行う 2 つ目の課題を学習者が少しでも主体的に行えるように意図していたからである。この課題はさらに授業後課題として動画の内容を簡潔に紹介する英語の紹介文作成ともリンクしている。

もう 1 つの課題は、授業中にランダムに組んだペアと一緒に、自分の視聴した動画の中から相手に薦めたい動画を選んで紹介し合うという協働学習である。25 分の時間をかけてお互いに語彙や文法や表現を確認しながら英語のやり取りを考えていくコミュニケーション

ン活動であり、自分の言いたいことを英語で表現しようとする場である。(前期は主に視聴した動画の紹介で行ったが、後期は学習者からの要望があり、動画紹介でもよいが原則としてペア同士で話題を決めてよいことに変更した。) 会話文が完成したら、お互いの台詞を音読録音して授業内に提出する。英会話文の作成時には機械翻訳の使用を可とし、機械翻訳を使用して産出した英文には目印をつけて提出するように指示した。

授業後課題は Google Forms を使って行うもので、提出する内容は ①EnglishCentral で視聴した動画の中から他の人に薦めたいものを 1 つ選んで書く英語による簡潔な紹介文(以下、EC 報告)、②授業中にペアで作成した英会話文、③授業後の振り返り、の 3 つである。①の EC 報告は 2 つ目の課題の英会話文を作成するとき利用できる英文でもあることから、実際には授業前に作成することになる。したがって、授業後の提出時には、すでに作成しておいた英文を Forms にコピー&ペーストするだけで済む。②は授業中にペアごとに 1 つのファイルを共有しながら作成した英会話文であり、こちらも同様に Forms で提出する際にはコピー&ペーストするだけでよい。実際に授業後に行うのは、③の授業後の振り返りである。授業中に学び取ったことや疑問に思ったことや次回の授業で扱って欲しいこと等を自由に記載する項目である。

5. 課題に対するフィードバックから新たな課題へ

学習者が授業後課題として提出した EC 報告と英会話文に対するフィードバック、および授業内に提出した音読に対するフィードバックは、次の授業の前半に行った。授業の課題とフィードバックの全体的な関係を図 1 で示す。太線で囲んだ部分が 1 回の授業として扱う内容である。各授業が個々に独立するのではなく前後の授業と矢印でつながっているのは、週 1 回 90 分の授業が孤立しているのではなく、授業前課題があつての授業、授業があつての授業後課題、授業後課題があつての次の授業、という連続した関係であることを示している。FB①と FB②の下にある太い下向き矢印は、課題後のフィードバックがゴールではなく、フィードバックが次の授業内課題へとつながると同時にその準備となることを示している。このように、課題とフィードバックがつながり、フィードバックが新たな課題へとつながり、それぞれの授業が前後の授業とつながっていることを学生に提示することで、学習の継続と積み上げを意識した授業であることを示した。

EC 報告と英会話文に関してのフィードバックは、図 1 で示した「FB①」の部分である。EC 報告に関するフィードバックでは、主に言語形式に関して、文法上の誤りに焦点を当て、講義形式で明示的に指摘した。英会話文に関してのフィードバックでは、言語形式だけでなく表現の不適切さや会話の流れの不自然さといった内容面について、学習者とのやり取りをとおして見つけ出しながら行った。どちらのフィードバックとも限られた時間内で行う必要があるため、網羅的ではなくその都度ポイントを絞って行った。補足説明では、

フィードバックで扱ったことと関係する文法事項の追加説明や、役立つと思われる定型表現の紹介を加えた。留意したのは、良い点の指摘を積極的に行うことであった。学習者が

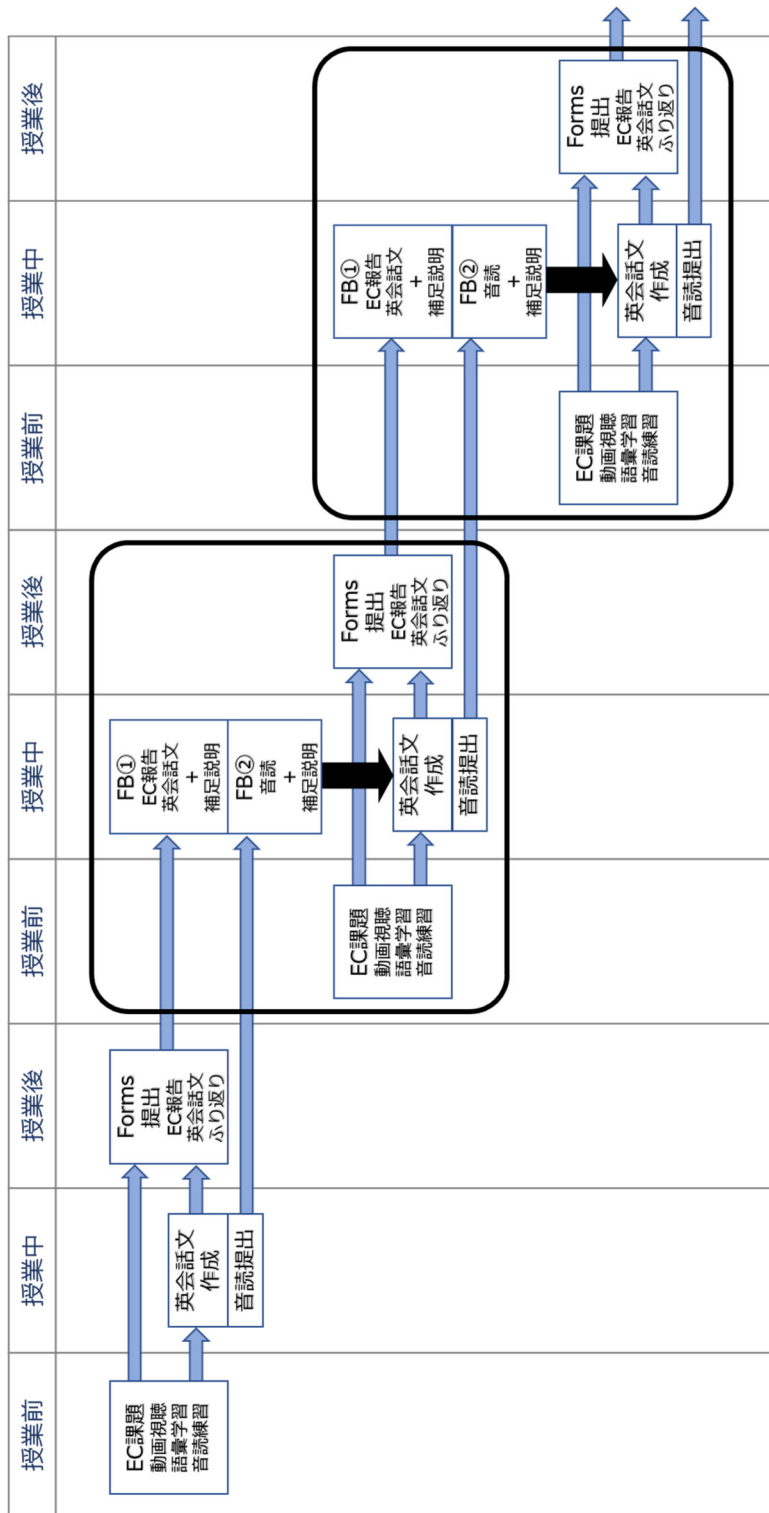


図 1 課題とフィードバックの関係

EC : EnglishCentral FB : Feedback

産出した良い例は、他の学習者に「こうすればよいのか」と気づいてもらう機会になり、教員がよい例を示すより学習者にとってより身近に感じてもらうのに役立つと考えたからである。また、機械翻訳を利用して作成した文に対しての誤訳の指摘や前処理や後処理の解説もここで行った。

提出された音読に対するフィードバックは、「FB②」である。提出された音声を実際に聞かせながら発音や読み方に関しての改善点を指摘した。補足として、英語の音声変化に関する説明や発音練習を行った。音読のフィードバックでも、臨場感のある録音、感情が伝わるような録音を良い例として全員に聴かせ、「こうすればよい」という例に触れる機会を作るとともに目指すべき音読録音の姿を共有した。

主要な2つの課題の他に、各学期に短い英語プレゼンテーションを2回、教員と1対1で行う英語インタビューを1回行った。初回授業時に「プレゼンテーションとインタビューは授業時間内に扱った既習学習内容で行う。事前準備をしてもよいが、原稿を見てはいけない」、「授業時間内での活動は、プレゼンテーションやインタビューで発信することに繋がるので、普段から意識して取り組んで欲しい」と伝えておいた。

6. 評価方法

成績評価は、毎週の提出物（音読録音、動画紹介文、英会話文、振り返り）で40%、プレゼンテーションとインタビューと期末試験がセットで60%とした。プレゼンテーションとインタビューは録画してループリックを利用したパフォーマンス評価を行い、期末試験では自分の動画を見ながら行う振り返り、一人二役での英会話文作成とその音読、そして発音練習の成果を確認する音読テストが含まれる。

7. 本授業全体と英会話文作成課題で期待できる効果と検証

本稿で取り上げている授業は、コロナ禍の前に下山（2019）が行った授業とほぼ同じものである。異なっているのは、すでに上記の図1の説明で述べたように課題とフィードバックが連続していることを示すことで学習の積み上げを明確にしたこと、ペアによる課題作成がICTの進歩でファイル共有によってなされたこと、英会話文作成時に機械翻訳の利用を許可していること、の3点である。

英会話文作成課題で期待できる効果は、以下のとおりである。

1. 主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成
2. 協働しながらコミュニケーション力と英語力を高める活動になっていること
3. 協働しながら自発的に英語力を高めていこうとする態度の育成

今回はこれに加えて、機械翻訳の利用が学習者の学習意欲を減退させるのか、促進させるのかという点も検証したい。

Ⅲ 英会話文作成課題における機械翻訳の利用と実態

1. 機械翻訳利用の背景

英会話文作成課題で機械翻訳を利用可とした理由の1つには、機械翻訳の出力結果の精度が近年著しく向上したことが挙げられる。しかし、主な理由は、学習者自身が必要な英語表現を自力で発見し、達成感を味わいながら主体的に学習を進めて欲しいとの願いからである。今までの実践から、学習者は伝えたくてもその英語表現がわからないと、その部分を回避した英会話文を作成する可能性が高いということがわかっている。この課題では、自分が表現したい内容を英語で表現できるようになることを目的としており、表現したいことを避けてしまうのでは本末転倒である。学習者自身の英語力では表現できない部分は日本語で表記しておいてもよいという指導を行ったこともあるが、このやり方では教員視点で学習者に指導すべき英語表現の発見はできても、学習者視点での英語による表現の発見や会話文作成の達成感は見込めない。たとえ機械翻訳を使っても、そこで出力された表現を見て、こう言えばよいのか、と自分とペアの相手で確認していく作業は主体的・対話的な学習であり、全てが英語で表現できたことが達成感につながると考えられる。

機械翻訳を英会話文作成課題で利用することを許した背景として、主な理由がもう1つある。それは、学習者が機械翻訳を使って出力した英文を使いながら、日本語と英語の構造の違いや語の持つイメージの違いにも言及できるからである。特に会話表現は、文脈の前後関係や人間関係や話者間の共有知識などの影響を受け、多くの場合は省略表現となる。しかし、MT 利用では日本語には表れない省略された要素を補わないと、実際には英語で伝えたい内容が適切に出力されない場合がある。入力する日本語で主語が明示されていない場合は、英語としては不自然な形で受動態が使われたり、私が主語であるべき内容があなた主語で出力されたりしてしまうこともある。このような日本語と英語の構造の違いに気づき慣れることは、語レベルの会話ではなく文レベルの会話ができるようになるために必要な過程であろう。

2. 機械翻訳利用で期待される効果

MT の利用は許可したが、MT 利用を推奨していたのではない。英会話文作成課題は自分の英語表現力を高めることが真の目的の活動であり、期末試験では MT や辞書等を使わずに自力で英会話文を作成することが求められる。MT 利用はあくまでも学習中の補助手段であり、期末試験のことを常に念頭に置きながら、自分が表現したい日本語内容を英語で少しでも多く伝えられるように、覚えて使えるようにすることを強調した。そこで期待される効果は、課題に取り組んでその後のフィードバックを受けながら、回を追うごとに MT 利用の頻度が減り、自力で表現できることが増えることである。

3. 機械翻訳の利用方法

MT 利用はあくまでも学習中の補助手段である。初回授業ではこのことを伝えたくて、MT 利用の留意事項も伝えた。会話文は相手との関係や文脈に依存する要素が多く、情報を省略した言い回しを多用することから、補うべきと思われる情報をできるだけ翻訳前の日本語に入れたり（前処理）、MT で出力された表現が会話の前後関係に適しているかを確認したり、出力された英文をもう一度日本語に再変換したりしながら（後処理）、利用する必要があること説明した。説明時には学生が無料で利用できる Google 翻訳と DeepL を使い、和英翻訳、英和翻訳、音読機能の利用例と逆翻訳（日本語→英語で出力された英語への翻訳結果を使い、英語→日本語の翻訳を行い、翻訳された英語が元の日本語と同じ内容を示しているかどうかを確認する作業：Back Translation）の方法を示した。実際に使用方法を見せることで、自分が言いたい台詞だけを入力しても適した英語表現が出てくるとは限らないこと、日本語では現れていない主語や目的語を入れないと意味の異なった表現が出てくる可能性があることを実感してもらった。また、幸重・蔦田・西山・Gally（2022）の MT を活用して学習する大学用テキストを参考にしながら以下の 5 点も伝えた。

1. 事前に英語では必要と思われる主語・述語・目的語を入れる
2. できるだけ簡潔な短い表現（短文）にする
3. 日本語特有の言い回しは、日本語母語話者でなくてもわかる表現にする
4. 日本語の言い換えに自信がなければ文章をそのまま翻訳してみる
5. 日本語→英訳→日本語訳で出力結果を確認してみる

英会話文に MT を利用した箇所がある場合は、利用した英文の直後に利用したツール名を入力しておくように指示を出しておいた。教員はその情報を使い、学習者が言いたいと言えなかった表現がどのようなものであったかを知ることができた。また、フィードバックの時に学習者が表現したいができなかった英語表現として取り上げ、全学習者に対して典型的な英語表現として、あるいは誤訳例として示しながら推奨する表現を紹介することができた。学習者の MT 利用報告から始まるアドバイスは、主体が学習者であることを示しながら行うことができる、有意義なアドバイスになると考えられる。

4. 機械翻訳の利用実態

英会話文作成課題は、前期に 10 回、後期に 12 回行った。各回における会話文の総英文数（1 語文を含む）、Google 翻訳・DeepL が使用された英文数、機械翻訳使用率（総英文数の中で機械翻訳が使用された百分率）を以下に示す（表 1）。

下山（2019）が行った分析では、MT 利用なしで同様の課題を 20 分間で行った結果、1 回目の総英文数は 172 文であり、回数を重ねるごとに増加していき、終わりの時期には 238 文であった。一方、今回の前期の MT 利用ありの結果では 1 回目から 255 文であり、

そのまま大きな傾向が認められないまま回数を重ねている。このことから、学習者が異なるために単純に比較はできないものの、MT を利用することは、発信量の増加を促す可能性があることを示唆している。

表 1 英会話文作成課題時の機械翻訳使用率

| 【前期】 | No.01 | No.02 | No.03 | No.04 | No.05 | No.06 | No.07 | No.08 | No.09 | No.10 | 平均 |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 総英文数 | 255 | 243 | 245 | 258 | 319 | 284 | 246 | 285 | 275 | 284 | 269.4 |
| 機械翻訳使用の文数 | 42 | 33 | 19 | 18 | 21 | 18 | 22 | 30 | 15 | 25 | 24.3 |
| 機械翻訳使用率 | 16.5% | 13.6% | 7.8% | 7.0% | 6.6% | 6.3% | 8.9% | 10.5% | 5.5% | 8.8% | |

| 【後期】 | No.11 | No.12 | No.13 | No.14 | No.15 | No.16 | No.17 | No.18 | No.19 | No.20 | No.21 | No.22 | 平均 |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 総英文数 | 279 | 244 | 253 | 243 | 249 | 250 | 319 | 260 | 175 | 231 | 228 | 326 | 254.8 |
| 機械翻訳使用の文数 | 33 | 34 | 25 | 20 | 61 | 24 | 41 | 44 | 16 | 34 | 25 | 45 | 33.5 |
| 機械翻訳使用率 | 11.8% | 13.9% | 9.9% | 8.2% | 24.5% | 9.6% | 12.9% | 16.9% | 9.1% | 14.7% | 11.0% | 13.8% | 13.0% |

次に MT 使用率を見ると、前期は、減少傾向になっている。EC 課題で視聴した動画を紹介する内容で英会話文作成課題を継続したために、使用する表現に慣れ、翻訳せずとも自力で英語表現できる部分が増えたからであると考えられる。第 8 回の使用率がやや上がっているのは、課題内容に飽きてきた様子が伺えたために、ペアで自由に話題を決めてよいことにしたことが原因として考えられる。10 回目は前期最後の課題であったため、「夏休みの過ごし方」を話題にするように指示した。今まで取り組んできたこととは異なる話題のために MT 使用率が上がると考えていたが、予想したほどではなかった。

一方、後期の MT 使用率は 8.2% から 24.5% まで散らばり、表 1 からでは何の傾向もつかめない。それは、課題で扱った話題が影響していると考えられる。後期に行った本課題の話題は、学習者から視聴動画紹介ばかりでは「飽きてきた」との言及があったため、学習者と相談し、原則として自由に決めてよいことにした。当初に予定していた視聴動画の紹介に固執するよりも、学習者自身が好きな話題で課題に取り組むことが、より主体的に協働する活動になると考えられたからである。実際に行った話題は以下のとおりである。

- 11 回：夏休みをどう過ごしたか
- 12 回：ペアで自由に話題を決める
- 13 回：ペアで自由に話題を決める
- 14 回：ペアで自由に話題を決める
- 15 回：ペアで具体的な状況（場面）を設定して会話をする
- 16 回：ペアで自由に話題を決める
- 17 回：好きな洋楽
- 18 回：朝、ぱったり久しぶりに友だちと会った時の会話

19回：海と山、どっちが好き？

20回：コーヒーと紅茶どっちが好き？

21回：ペアで自由に話題を決める

22回：ペアで自由に話題を決める

11回から14回までの減少傾向は、同一話題で行わなかったとは言え、フィードバックと補足説明で示した表現を利用できるようになって新規に調べる表現が少なくなったことで説明できる。しかし、15回の「具体的な状況（場面）を設定して会話をする」では、MT使用率が急増している。最初はわからなかったが、その回の学習者からの振り返りを確認したところ、新たな表現にチャレンジするよう課題を始める前に筆者が声掛けをしたことが理由であったと考えられる。

以上のことから、第3章2節でMT利用により期待される効果として示したMT利用頻度の減少は、確認できたと言えよう。

5. 機械翻訳で使われた表現

MTを使った表現の後にそのツール名を記載するよう指導していたことから、学習者が英語で表現したいと考えているが自力ではできない表現を数多く知ることができた。単語レベルのもの、文法レベルのもの、学習者が日常的に日本語の会話の中で使っているが英語でどう表現すればよいかわからないもの、長くて学習者がわかりやすい表現に置き換えられなかったと思われる表現などさまざまである。以下にいくつかの例を挙げておく。

●単語レベルのもの

I'm not good with thrill rides. (絶叫マシン苦手なんだ)

●文法レベルのもの [前置詞]

on TikTok (TikTokで)

●英語でどう表現するかわからないもの

I'm too broke these days. (最近、お金がなさすぎ。)

I'm rooting for you. (応援してるよ。)

As is often the case in the hospitality industry, that was tough.

(接客業ではよくあることだけど、それは大変だね。)

I've had that experience too. (私もそういう経験したことある。)

Sorry for holding you back. (引き留めてごめんね。)

●長くてわかりやすい表現に置き換えられなかったもの

I don't like customers who pull out their point cards after they've paid their bill.

(会計を済ませた後にポイントカードを出してくるようなお客は嫌い。)

使えるようになりたい英語表現に出会うことができるのは、MT使用の大きなメリットと言える。

一方で、適さない変換結果があったことも確かである。英語に変換された表現を確認しなかったために生じた例としては、自分の好きな洋楽の説明としての **I like it because the rust gets exciting!** が挙げられる。「サビが盛り上がるので好き！」を英語で表現したかったが、「サビ」を「錆び」と変換されていることに気づけなかったのだろう。このような例を見つけたときは課題提出の次の授業でフィードバックとして取り上げ、「曲のサビ」は **chorus, climax** と表現することを示した。また、「おいしそうだね」を機械翻訳で出力した結果がおかしいという例もあった。話を聞いて「おいしそうだね」であれば動詞に **sound** を使い、何かを見て「おいしそうだね」であれば動詞に **look** を使うわけだが、英語力がないと気づかないことかもしれない。このような例は、フィードバックとして基本的な動詞の使い方を説明するよい機会となった。

逆翻訳をすればおかしいとわかるだろうと推測できる文もかなりあったが、それは 25 分間という制限時間がある課題の中で行われていることであり、正しいかどうかを検証する時間を十分に取ることができなかったことが理由であると考えられる。

IV 最終授業時アンケート結果の分析と考察

最終授業時に、本授業全体に関する項目と各課題に関する項目からなるアンケート調査を行った。設問項目に 6 段階で回答するものと、自由記述から成る。

ペア英会話文作成課題に関するアンケート項目内容と結果の平均値を表 2 に示す。
 (1: 全く当てはまらない / 2: あまり当てはまらない / 3: どちらかという当てはまらない / 4: どちらかという当てはまる / 5: 当てはまる / 6: とても当てはまる)

表 2 ペア英会話文作成課題に関するアンケート調査結果 (回答者数 29)

| 項目 | 後期末 |
|--------------------------------|-----|
| (a) ペア英会話文作成課題に積極的に取り組んだ | 5.1 |
| (b) ペア英会話文作成課題が楽しかった | 4.9 |
| (c) ペア英会話文作成課題で学び合うことができた | 5.0 |
| (d) ペア英会話文作成課題の録音では臨場感を出すようにした | 4.6 |
| (e) ペア英会話文作成課題でコミュニケーション力が高まった | 4.7 |
| (f) ペア英会話文作成課題で英語の表現を覚えた | 4.6 |

第 2 章 7 節では、本課題で期待される 3 つの効果を挙げた。表 2 の結果から、全体としては 3 つとも期待される効果はあったと考えられる。(a) と (b) の結果より本課題に積極的に楽しく取り組んだとわかることから、1 つ目の期待される効果である「主体的にコミュ

ニケーションを図ろうとする態度の育成」は達成できていたと判断できる。(c)(e)(f)の結果からは、人と関わり合いながらコミュニケーション力が高まり英語表現を覚えていったことがわかり、2 つ目の「実践的に英語コミュニケーション力を高める活動になっていること」についても全体としては期待どおりの結果が得られた。また、(a)から(f)の全ての項目の結果から判断すると、会話場面を意識してコミュニケーション力を高めつつ英語表現も覚える課題であり、その課題に積極的に取り組みながら楽しく学び合ったと判断でき、3 つ目の「協働しながら自発的に英語力を高めていこうとする態度の育成」も期待した効果をほぼ達成できていたと言える。

本授業全体に関する設問項目と 6 段階による回答結果と平均は、表 3 に示すとおりである。(1:全く当てはまらない/2:あまり当てはまらない/3:どちらかという当てはまらない/4:どちらかという当てはまる/5:当てはまる/6:とても当てはまる)

表 3 授業全体に関するアンケート調査結果 (回答者数 29)

| 項目内容\回答 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 平均 |
|-------------------------|-------------|-------------|-------------|---------------|---------------|---------------|-----|
| a) 本授業に楽しく取り組めた | 0.0% (0) | 0.0% (0) | 0.0% (0) | 34.5% (10) | 31.0% (9) | 34.5% (10) | 5.0 |
| b) 本授業前よりも英語が好きになった | 0.0% (0) | 0.0% (0) | 6.9% (2) | 44.8% (13) | 34.5% (10) | 13.8% (4) | 4.6 |
| c) 本授業前よりも英語が楽しくなった | 0.0% (0) | 0.0% (0) | 0.0% (0) | 51.7% (15) | 27.6% (8) | 20.7% (6) | 4.7 |
| d) 本授業前よりも英語の力がついた | 0.0% (0) | 0.0% (0) | 6.9% (2) | 41.4% (12) | 44.8% (13) | 6.9% (2) | 4.5 |
| e) 今、英語の力をもっとつけたいと思っている | 0.0% (0) | 0.0% (0) | 6.9% (2) | 24.1% (7) | 34.5% (10) | 34.5% (10) | 5.0 |

下段 () 内は人数

表 3 で示しているように、英会話文作成課題だけでなく他の課題や活動を含めた授業全体として、学習者自身が学習意欲を高めながらコミュニケーション力と英語力が高まったと自覚できる授業であったと言える。この結果から、MI 利用が学習者の学習意欲を減退させるのではなく、むしろ促進させていると判断できる。

自由記述に関しては、テキストマイニングのためのフリーソフトウェア「KH Coder 3.Beta.03i」(樋口, 2000) を使って分析した。4 回以上抽出された語を頻度順に並べた結果を図 2 に示す。その抽出語の出現パターンを可視化して内容を分析するために行った共起ネットワークの結果を図 3 に示す。

| # | 抽出語 | 品詞/活用 | 頻度 |
|------|-----------|-------|----|
| 1 | 英語 | 名詞 | 25 |
| 田 2 | 楽しい | 形容詞 | 16 |
| 3 | 授業 | サ変名詞 | 15 |
| 4 | ありがとう | 感動詞 | 10 |
| 田 5 | 思う | 動詞 | 9 |
| 6 | 会話 | サ変名詞 | 8 |
| 7 | 自分 | 名詞 | 8 |
| 8 | 会話文 | タグ | 7 |
| 9 | 今 | 副詞可能 | 7 |
| 10 | 表現 | サ変名詞 | 7 |
| 田 11 | 学ぶ | 動詞 | 6 |
| 12 | 作成 | サ変名詞 | 6 |
| 田 13 | 話す | 動詞 | 6 |
| 14 | コミュニケーション | 名詞 | 5 |
| 15 | ペア | 名詞 | 5 |
| 16 | 苦手 | 形容動詞 | 5 |
| 17 | 英会話 | 名詞 | 4 |
| 田 18 | 感じる | 動詞 | 4 |
| 19 | 好き | 形容動詞 | 4 |
| 田 20 | 使う | 動詞 | 4 |
| 21 | 自然 | 形容動詞 | 4 |
| 田 22 | 出来る | 動詞 | 4 |
| 23 | 年間 | 名詞 | 4 |
| 24 | 文法 | 名詞 | 4 |

図 2 自由記述で 4 回以上出現した語（頻度順）

出力された共起ネットワークでは、実線で結ばれている語と語が共起関係を示している。この図を参考にしながら、各抽出語を KH Coder の機能の 1 つである KWIC コンコーダンスで検索し、文脈を確認した。図 3 で左側に示された「英語」「楽しい」「授業」「ありがとう」「学ぶ」「思う」が実線でつながっている部分から、授業で英語を楽しく学んだと思っていて感謝していると読みとれる。中央上で「会話文」「作成」「ペア」「できる」が実線でつながっていることから、ペアで会話文を作成することで有能感が高まったと解釈できる。右側の「自然」と「会話」が実線で結ばれていることから、自然な会話が言及されていたとわかる。「自分」「コミュニケーション」「好き」「文法」「今」「苦手」は、「苦手」だけが否定的概念の語であるために、一見すると解釈が難しい。しかし、KWIC コンコーダンスを使って「苦手」が登場する文脈を確認した結果、全て「苦手だったが、今は」という使われ方をしていることが分かった。したがって、苦手だったコミュニケーションだが、自分ができるようになって好きになり、コミュニケーションを通して文法の確認をすることができた、ということである。

選択式のアンケート結果に加えて自由記述からも、本授業で期待した効果を達成できたと判断することができる。

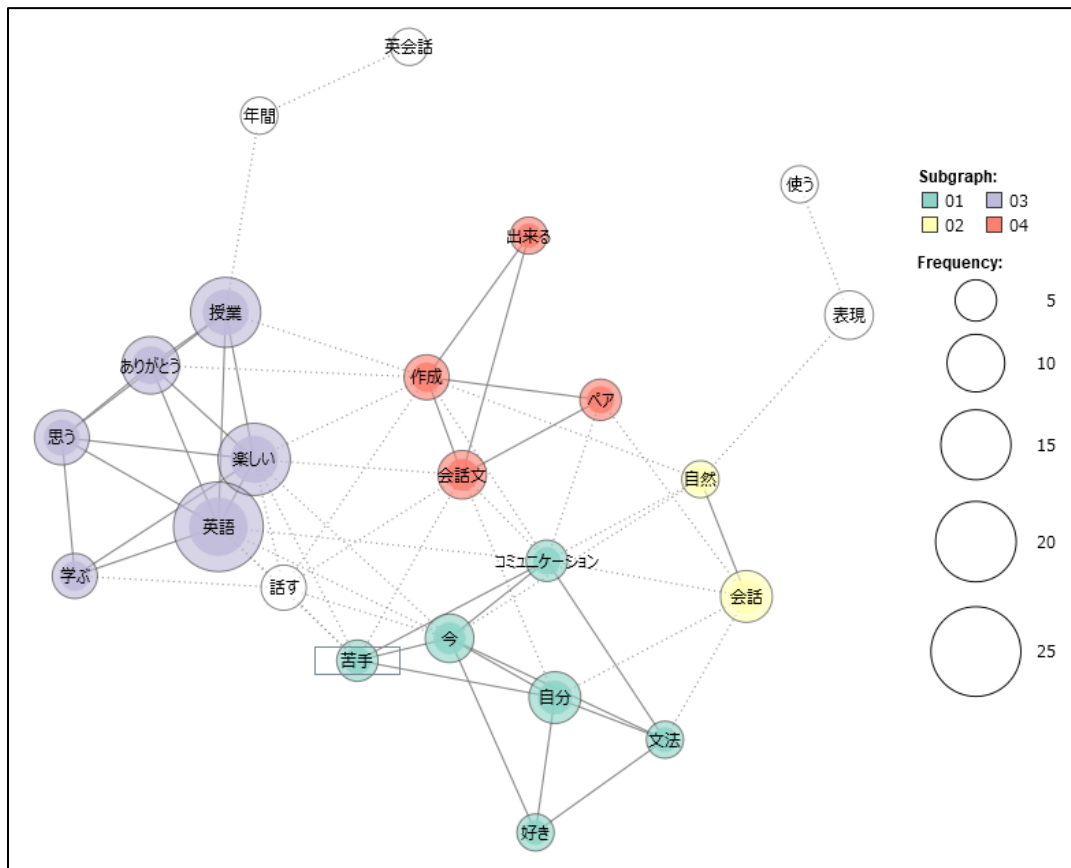


図3 自由記述で4回以上出現した語の共起ネットワーク

V まとめと今後の課題・展望

本稿では、発信型の英会話文作成課題とフィードバックをとおして授業前・授業中・授業後および各授業がつながっていることを学習者に提示することで、学習の継続と積み上げを教員と学習者が共有する設計の授業実践例を報告した。後期は当初の予定とは異なり各ペアで自由に話題を展開する機会を与えることになったが、結果として学習者が主体的かつ対話的に課題に取り組む意欲を高めることに役立つと言える。また、MTを授業課題で利用することが学習意欲を減退させることにはならず、MT利用が発信量を増加させることが示唆されたことから、むしろ学習意欲を高めることに役立つと考えられる。本稿で報告した授業実践は、最終授業時のアンケート結果からもわかるように、発信することで自らの実力不足を実感したとしても「できる」喜びとさらに実力を高めたいという意欲が保たれている授業形態であったと言える。

一方、本稿ではMTで出力された英文自体の分析にほとんど触れていない。発信された誤英文の分析を下山（2019）がしているように、MT利用で発信された誤英文に関しても分析を行う必要がある。さらに、会話文のやり取りの中で、情報がどのように伝達され、どのように受け取られたのかというコミュニケーションからの視点で分析されていない。発信型指導には「何をどれくらい」だけでなく「どのように」に焦点を当てた分析も必要だろう。この2点の分析を行うことが、今後の課題である。

また、授業の改善も必要である。今回の発信型英語授業では、即興性のある発信の要素が組み込まれていない。次年度は、即興性のあるやり取りを入れた実践を計画中である。

現在、AIを活用したICTが世間を賑わせている。特に2022年11月に発表された対話に特化したAIサービス「ChatDPT」は、MTを遥かに超えた新しいツールと言える。人と対話することなく、あたかも人と話しているように情報を提供してくれる。このような新しいツールが登場しても、利用を拒絶するのではなく上手に活用することで、新しい指導方法が生み出され、新しい形での学習へとつなげていけると信じている。学習者の学ぶ喜びを担保しつつこれからもさまざまな英語指導実践に取り組み、英語教育の一助となる報告を続けていきたい。

引用文献

- 小田登志子（2019）「機械翻訳と共存する外国語学習活動とは」東京経済大学人文自然科学研究会『人文自然科学論集』145, 3-27. <http://hdl.handle.net/11150/11398>
- 蔵屋伸子（2019）「英語ライティング指導における機械翻訳サービスの利用意義—実践に向けた移行準備として—」日本国際情報学会誌『国際情報研究』16 (1), 24-35.
- 下山幸成（2019）「ペアによる協働学習の効果：授業内英語スキット作成課題の分析」『日本実用英語学会論叢』25, 27-36.
- 下山幸成（2022）「英語リスニング・スピーキング指導実践のためのブレンド型授業デザイン」『東洋学園大学 教職課程年報』4, 15-31.
- 樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析 [第2版] —内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版.
- 文部科学省（2017a）「【外国語活動・外国語編】小学校学習指導要領（平成29年告示）解説」
https://www.mext.go.jp/content/20220614-mxt_kyoiku02-100002607_11.pdf
- 文部科学省（2017b）「【外国語編 英語編】中学校学習指導要領（平成29年告示）解説」
https://www.mext.go.jp/content/20210531-mxt_kyoiku01-100002608_010.pdf
- 文部科学省（2018）「【外国語編 英語編】高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説」
https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf
- 幸重美津子・蔦田和美・西山幹枝・トム＝ガリー（2022）『Let's Work with AI（AI翻訳で英語コミュニケーション）』三修社.